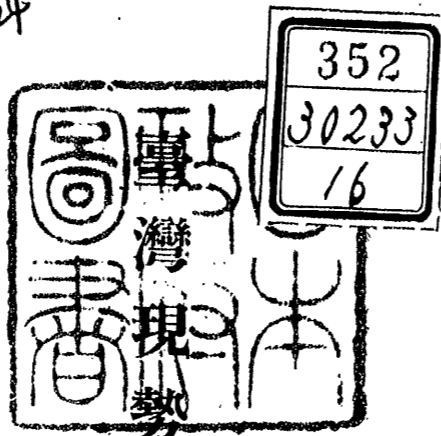


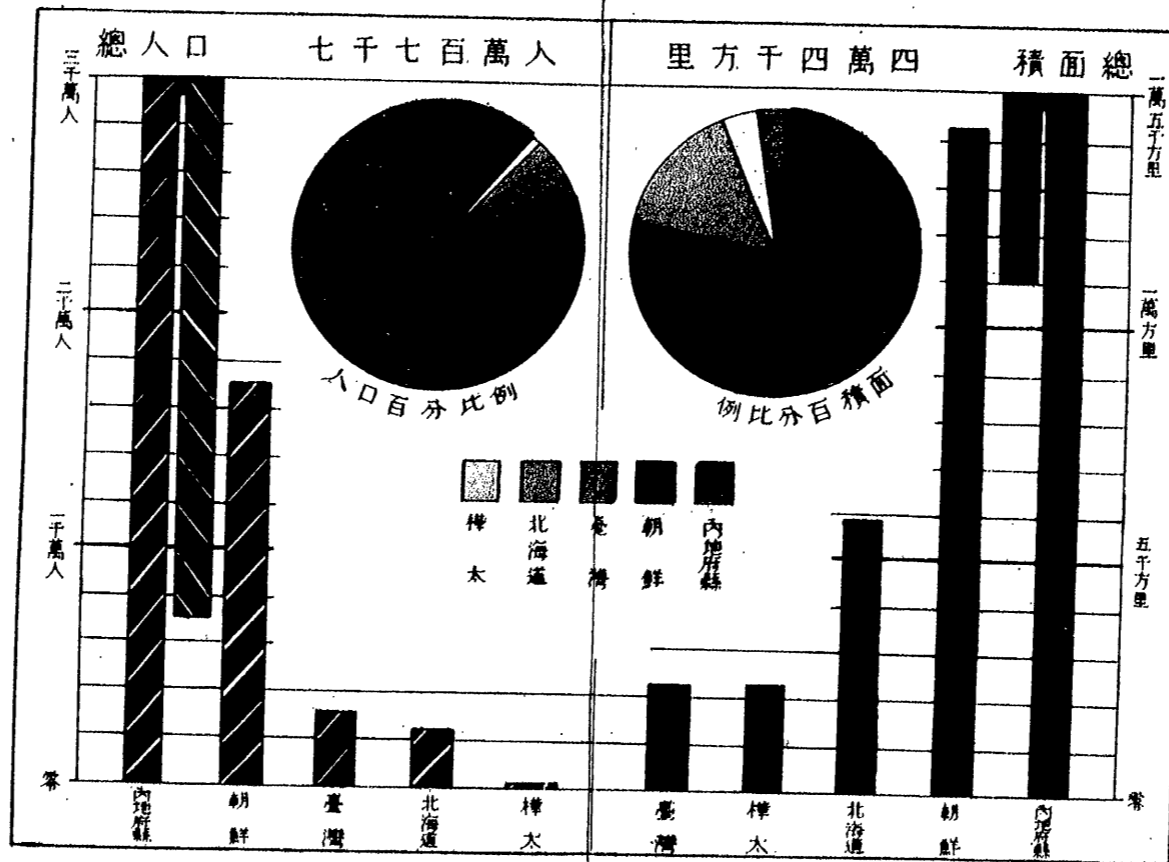
35/24



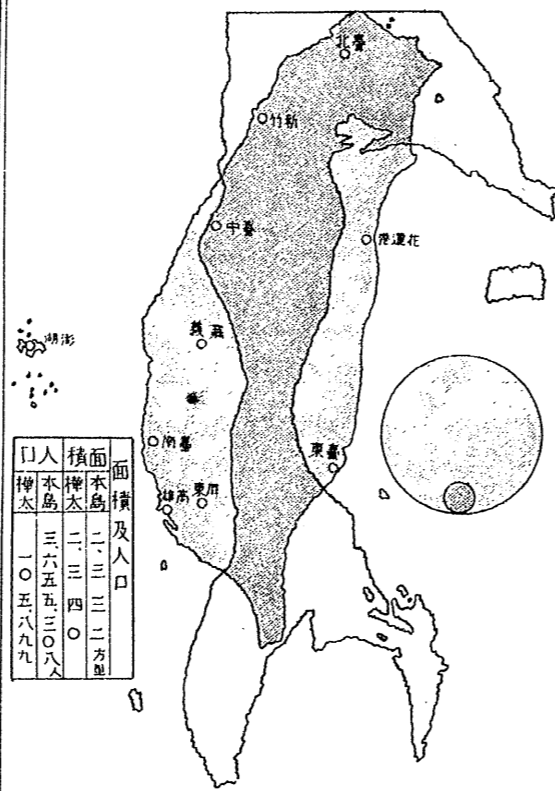
要覽

Handwritten notes on the right page, including the number '25' and some illegible characters.

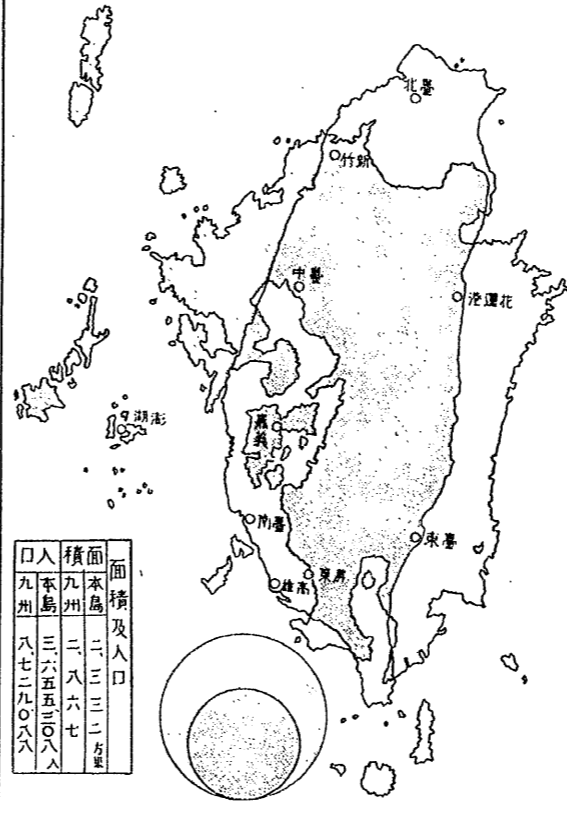
帝國の積及人口



較比口人積面太樺及灣臺

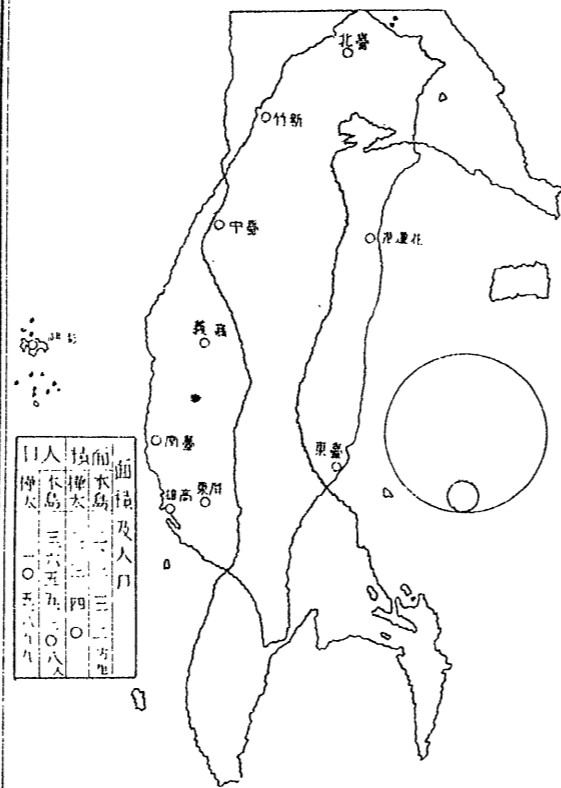


較比口人積面州九及灣臺

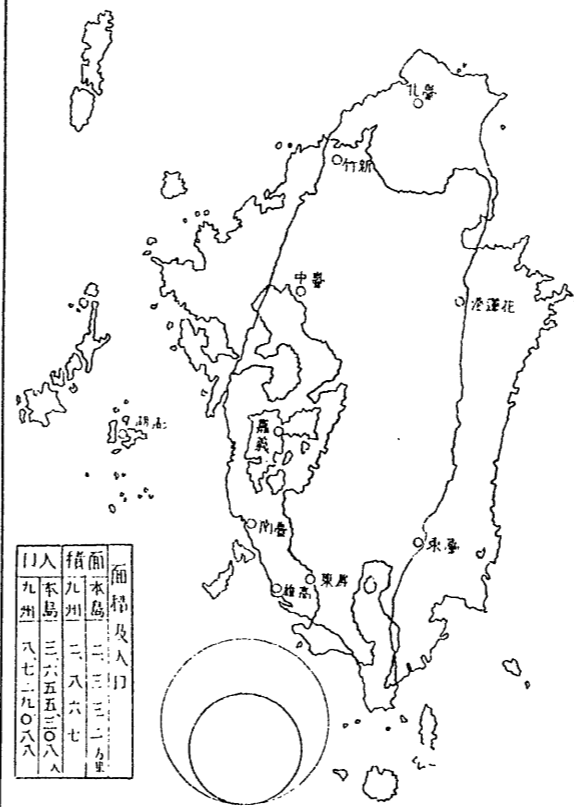


露光量違いにより重複撮影

較比人口積面積及臺灣

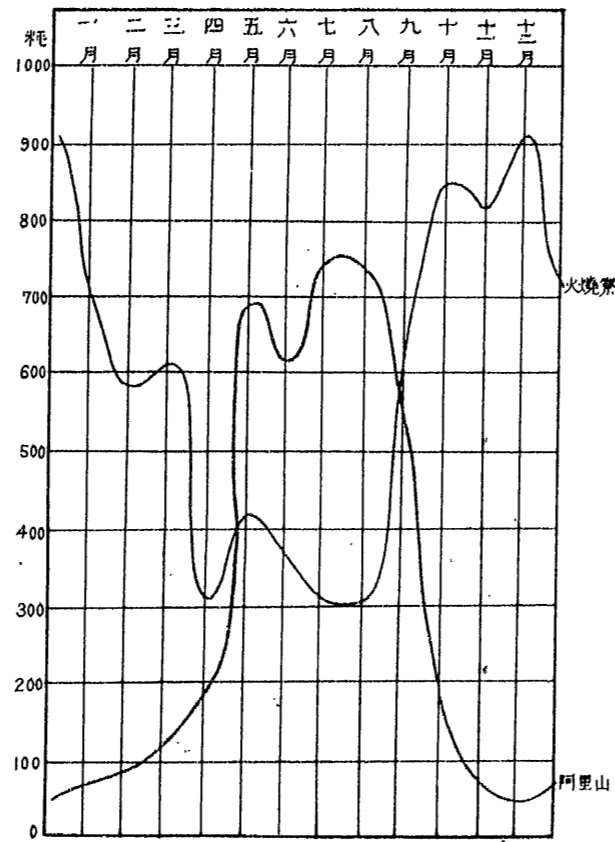


較比人口積面積九州及臺灣

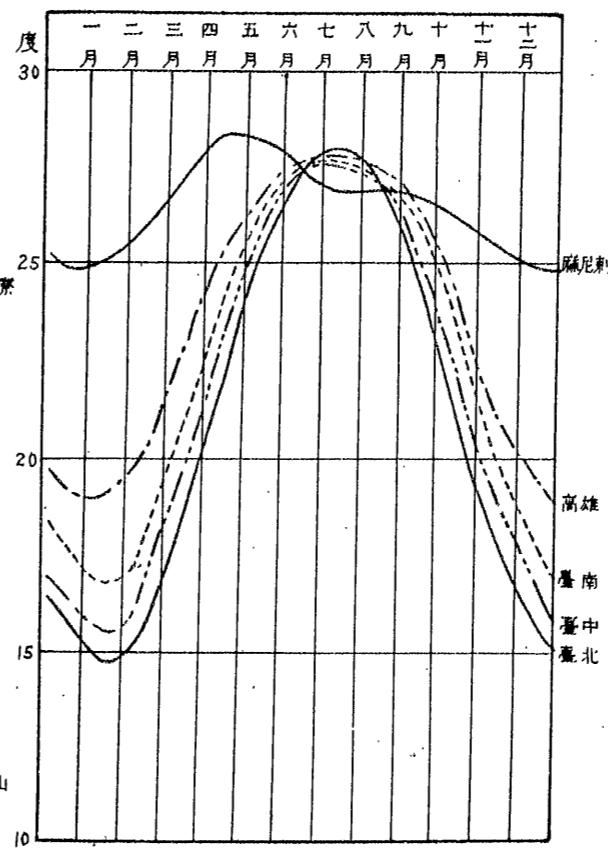


露光量違いにより重複撮影

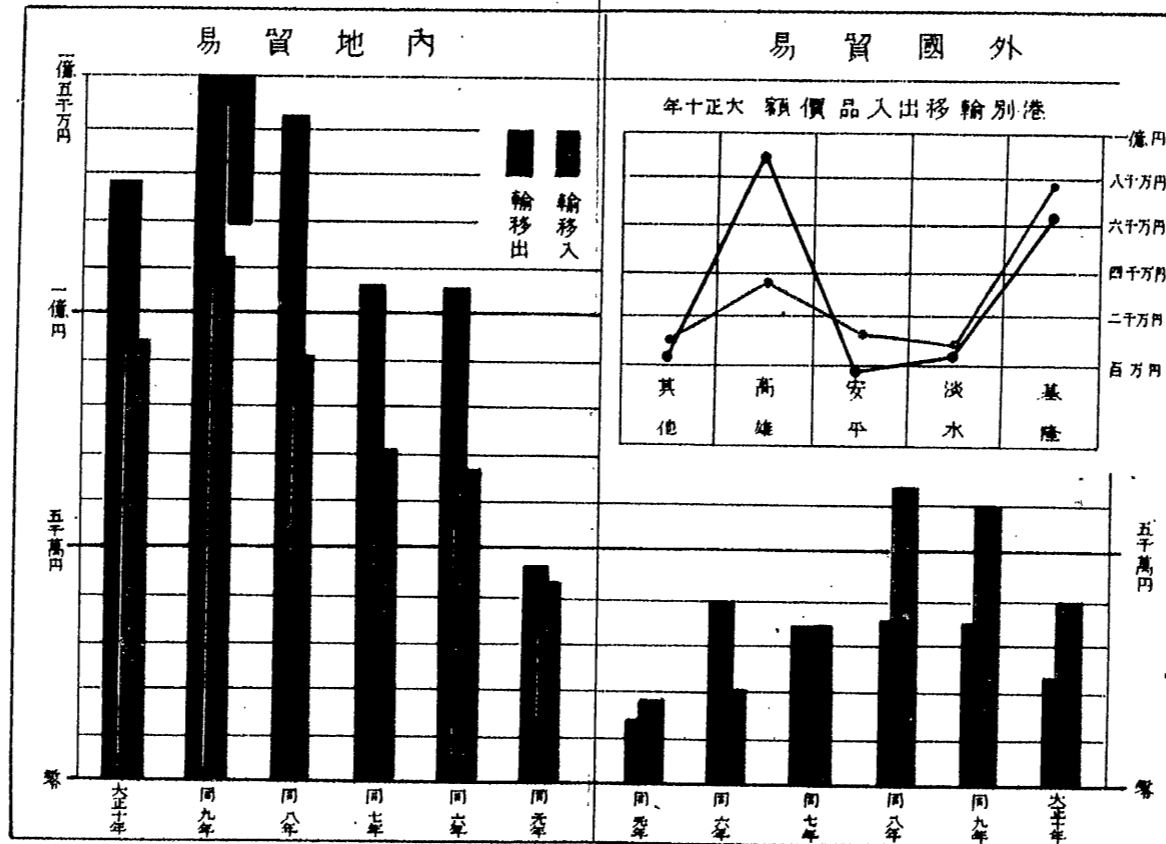
火燒寮及阿里山降雨量比較

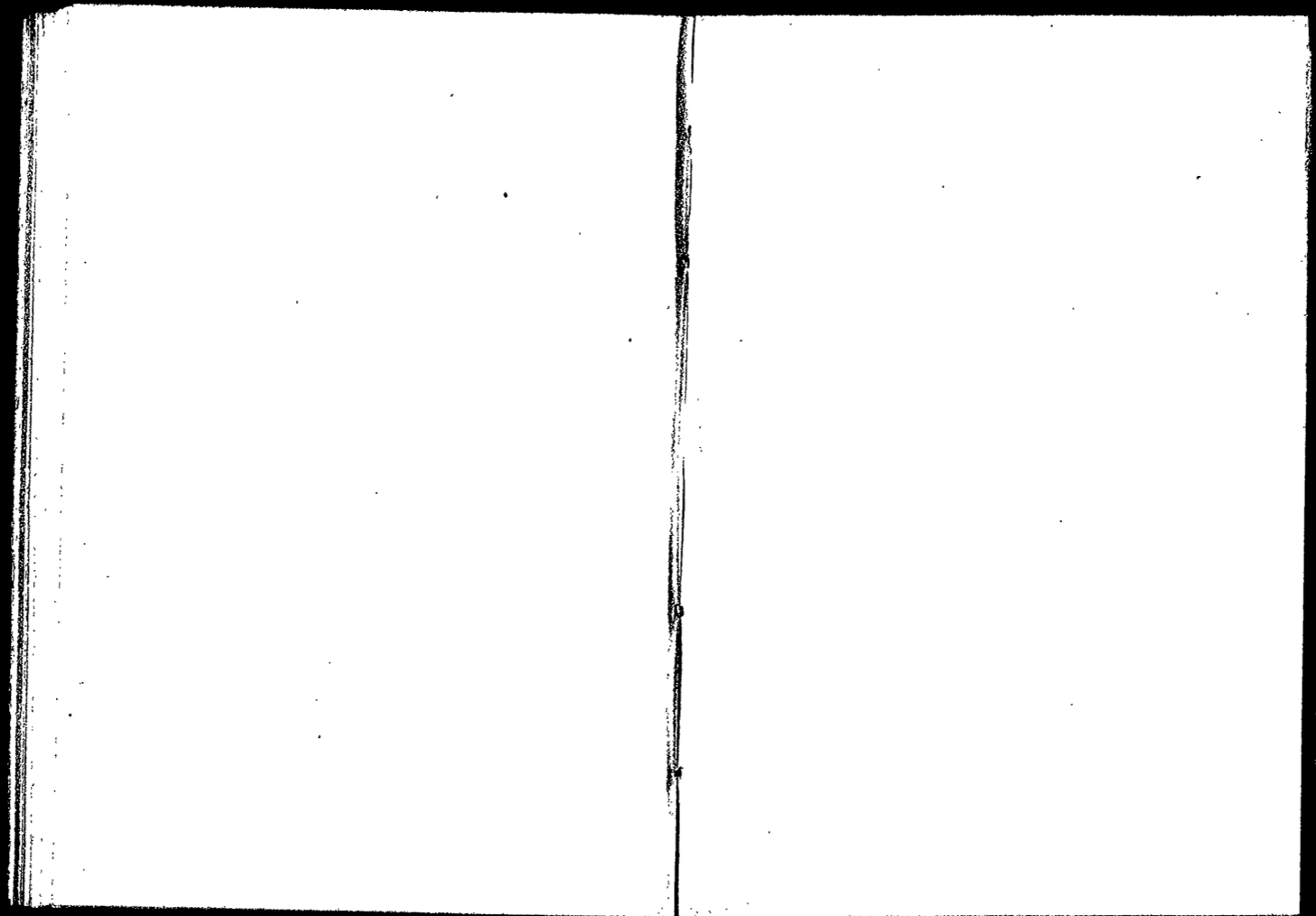


臺灣及麻尼刺の平均氣温



臺灣の貿易





凡 例

- 一 本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 一 本書は、大正十年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、勢めて之を採り、又大正十年の事實不明のもの又は特に必要と認めたるものは、大正十年以前の統計をも採りたり。
- 一 本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧げたり。
- 一 本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんか爲め、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

大正十二年二月

臺灣總督府

臺灣現勢要覽目次

一	位置	一
二	面積	一
三	山嶽	一
四	河川	一
五	土地の利用	一
六	氣温	一
七	雨量	一
八	人口	一
九	本籍別内地人	一
一〇	在外臺灣人	一
一一	在留外國人	一
一二	臺灣語を話す内地人	一
一三	國語を解する本島人	一

- 一四 婚姻、離婚、出生、死亡..... 四
- 一五 出生率..... 五
- 一六 死亡率..... 五
- 一七 人口の増加..... 六
- 一八 藩人..... 六
- 一九 行政區劃..... 六
- 二〇 州及廳の面積..... 七
- 二一 州及廳の人口..... 七
- 二二 主要都市..... 七
- 二三 農業戸數..... 七
- 二四 耕地面積..... 八
- 二五 水利..... 八
- 二六 農産..... 八
- 二七 畜産..... 九
- 二八 林産..... 九

- 二九 礦産..... 一〇
- 三〇 水産..... 一〇
- 三一 工業..... 一〇
- 三二 糖業..... 一〇
- 三三 貿易..... 一〇
- 三四 對手國別外國貿易..... 一〇
- 三五 支那香港及南洋貿易..... 一〇
- 三六 重要品別外國貿易..... 一〇
- 三七 重要品別内地貿易..... 一〇
- 三八 港別貿易..... 一〇
- 三九 財政..... 一〇
- 四〇 專賣..... 一〇
- 四一 銀行..... 一〇
- 四二 物價..... 一〇
- 四三 教育..... 一〇

四四	衛生機關	六九
四五	水道	七三
四六	ベストミマリア	七五
四七	阿片吸食特許者	七八
四八	鐵道	八二
四九	郵便、電信、電話	八五
五〇	警察官署及職員	八九
五一	最近十年間の進歩	九五

圖表

一	帝國の面積及人口	九五
二	臺灣及九州面積人口比較	九五
三	臺灣及樺太面積人口比較	九五
四	臺灣及麻尼刺の平均氣溫	九五
五	火燒寮及阿里山降雨量比較	九五
六	臺灣の貿易	九五

臺灣現勢要覽

一 位置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其の他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に纏むるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百二十四哩にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峡を隔て、近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔て、遠く米大陸に相對し、南はパツシー海峡を隔て、近く比律賓群島に相隣す。

一 經度及緯度

臺灣本島	經度(東經)	極東	臺北州基隆郡棉花嶼東端	123°08'
	緯度(北緯)	極南	高雄州恒春郡七星岩南端	22°01'
		極西	臺南州北港郡口湖庄新港西端	120°01'
		極北	臺北州基隆郡彭佳嶼北端	25°06'

澎湖島

經度(東經) 極東 高雄州澎湖郡查母嶼東端 二九八
 極西 高雄州澎湖郡花嶼西端 二九六
 緯度(北緯) 極南 高雄州澎湖郡大嶼南端 二二〇
 極北 高雄州澎湖郡目斗嶼北端 二二四

二 距 離 基隆を基點とする直航距離

那	鹿	長	門	神	橫	釜	大	福
新	島	崎	司	戶	濱	山	連	州
三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一

厦 汕 上 香 海 四 盤 新
 門 頭 港 刺 防 貫 谷 坡
 門 頭 港 刺 防 貫 谷 坡

三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二
---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

二 面積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬三千九百八十方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍々小さく、樺太を伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、丁抹(二、六一六方里)と利蘭(二、一一二方里)との中間に位す。

總數	面積 方里	百分比
臺灣	2,332	5.3
朝鮮	1,450	3.5
樺太	1,000	2.5
北海道	547	1.4
内地府縣	1,903	4.8

本表の外租借地として關東州の面積二九方里あり。

三山嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總数は百五十座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帯、暖帯、温帯、寒帯等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通して一萬尺以上の高山は總數五十五座を算し、就中臺灣四十八座を占め、内地は僅かに七座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千七十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山赤石山は僅かに四十五位を占むるに過ぎず。

新高山	海面よりの高さ	順位
シルビヤ山	13,050 尺	一
秀姑巒山	12,561	二
マボラス山	11,520	三

南湖大山	2511	五
富士山(内地)	3776	六
中央尖山	3300	七
關山	3100	八
大水窟山	3046	九
嵯栗圭山北峰	2855	〇
東郡大山	2855	一
大霧山	2800	二
大初尖山	2753	三
霧峰	2746	四
嵯栗圭山	2655	五
東郡大山	2556	六
合歡山	2500	七
北合歡山	2300	八
東合歡山	2100	九

南玉山	2151	〇
桃山	2128	一
シシカン山	2125	二
翠山	2125	三
丹大山	2124	四
白姑大山	2102	五
嵯栗圭山南峰	2105	六
南双頭山	2100	七
能高山南峰	2100	八
卑南山	2095	九
千卓萬山	2095	〇
カシバナン山	2086	一
郡大山	2085	二
タロコ大山	2085	三
卓社大山	2086	四

小關山	10,470	五
能高山	10,321	五
屏風山	10,223	五
大武山	10,223	七
尖山	10,223	八
バトツノ山	10,221	八
ハイノトナシ山	10,220	八
マビザン山	10,220	八
白石山	10,216	八
ウハノシン山	10,214	八
赤石山(内地)	10,214	八
東俣山(内地)	10,211	八
檜ヶ嶽(内地)	10,210	八
安東郡山	0,124	八
巒大山	10,110	九

御嶽(内地)	10,216	五
關門山	10,208	五
大石公山	10,200	五
白根嶽(内地)	10,200	五
小霧山	10,024	五
大連嶽(内地)	10,000	五

内地の分は第四十四回國勢一表に依る。

四河川

臺灣は幅員狭く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高
峯南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むべからず。
流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二
里に過ぎず。

濁水溪	四二〇
下淡水溪	三九七
曾文溪	三三七
淡水河	三三一
大甲溪	三〇〇
烏甲溪	二八六
八獎溪	二八三
秀姑巒溪	二七六
卑南溪	二二五
大安溪	二〇五

本表は流域二十里以上のもののみを掲ぐ。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百七十萬甲にして、内耕地七十七萬六千甲、林野二百八十萬甲、其の他十三萬甲なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の三割二分にして、臺灣は二割九厘を以て之に亞き、樺太の四厘最も小なり。林野に於ては樺太の九割二分最も大にして、臺灣は七割五分七厘を以て之に亞き、關東州の八分八厘最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは關東州の五割九分にして、臺灣の三分四厘最も小なり。

關東州	樺太	朝鮮	臺灣	實數			百分比例		
				耕地	林野	其他	耕地	林野	其他
10,500,000	1,500,000	4,500,000	7,500,000	3,000,000	2,000,000	1,500,000	30.4	55.7	13.9
10,500,000	1,500,000	4,500,000	7,500,000	3,000,000	2,000,000	1,500,000	28.6	52.1	19.3
10,500,000	1,500,000	4,500,000	7,500,000	3,000,000	2,000,000	1,500,000	28.6	52.1	19.3

北海道

内地府縣

實數の單位は

耕地は

林野は

九年度末現在、

なり。

八三〇〇

五四九七〇

三〇三三〇

九〇

六五

三五

五二四七〇

一六八四三

七四七〇

一七七

五七〇

二五

甲(九反七畝二十四歩)

にして其他は町なり。

其の他は大正九年末現在なり。

朝鮮は大正九年五月末日現在、樺太は大正

九年度末現在、關東州は大正十年末現在、内地及北海道は大正七年度末現在

六 氣 温

臺灣は北回歸線に跨り、半は熱帯圏に位するか故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣温は敢へて内地より高しと謂ふにあらす。而も冬季は頗る暖かにして、高山ならざれば降雪なく、北部に於ては偶々霜を見ることなしとせざるも極めて稀なり。

今内地其の他と比較するに、累年平均氣温は我臺灣最も高きも、最高極度の氣温に至りては内地其の他の部分却つて高し。即ち臺東の三十九度（華氏百二度二分）は新潟の三十九度一分（華氏百二度四分）より一分低く、又臺北の三十七度五分（華氏九十九度五分）は京城と同じくして大阪の三十七度六分（華氏九十九度七分）より一分低し。更に恒春の三十四度九分（華氏九十四度八分）は大泊函館及札幌を除けば他の何れの地方よりも低し。

更に臺灣各地の氣温は之を南緯麻尼刺に比すれば遙かに低し、是れ麻尼刺の氣温は一年を通じて著しき變化なきに反し、臺灣は冬季の氣温著しく低下するに依る。

地名	大正十年平均			累年平均			最高の極			最低の極		
	攝氏	華氏	度	攝氏	華氏	度	攝氏	華氏	度	攝氏	華氏	度
恒春	15.3	59.5	2	15.2	59.4	2	19.9	67.8	7	10.1	50.2	2
東春	15.4	59.7	2	15.3	59.5	2	19.9	67.8	7	10.1	50.2	2
南東	15.5	59.9	2	15.4	59.7	2	20.0	68.0	7	10.2	50.4	2
澎湖	15.6	60.1	2	15.5	59.9	2	20.1	68.2	7	10.3	50.6	2
中	15.7	60.3	2	15.6	60.1	2	20.2	68.4	7	10.4	50.8	2
北	15.8	60.5	2	15.7	60.3	2	20.3	68.6	7	10.5	51.0	2
鮮	15.9	60.7	2	15.8	60.5	2	20.4	68.8	7	10.6	51.2	2
金山	16.0	60.9	2	15.9	60.7	2	20.5	69.0	7	10.7	51.4	2
京城	16.1	61.1	2	16.0	61.0	2	20.6	69.2	7	10.8	51.6	2
天津	16.2	61.3	2	16.1	61.2	2	20.7	69.4	7	10.9	51.8	2
大泊	16.3	61.5	2	16.2	61.4	2	20.8	69.6	7	11.0	52.0	2

地名	大正十年平均			累年平均			最高の極			最低の極		
	攝氏	華氏	度	攝氏	華氏	度	攝氏	華氏	度	攝氏	華氏	度
關東州	10.5	50.9	2	10.1	50.2	2	15.4	59.7	2	4.8	40.6	2
旅順	10.6	51.1	2	10.2	50.4	2	15.5	59.9	2	4.9	40.8	2
北海道	10.7	51.3	2	10.3	50.6	2	15.6	60.1	2	5.0	41.0	2
函館	10.8	51.5	2	10.4	50.8	2	15.7	60.3	2	5.1	41.2	2
札幌	10.9	51.7	2	10.5	51.0	2	15.8	60.5	2	5.2	41.4	2
旭川	11.0	51.9	2	10.6	51.2	2	15.9	60.7	2	5.3	41.6	2
内地府縣	11.1	52.1	2	10.7	51.4	2	16.0	60.9	2	5.4	41.8	2
那覇	11.2	52.3	2	10.8	51.6	2	16.1	61.1	2	5.5	42.0	2
長崎	11.3	52.5	2	10.9	51.8	2	16.2	61.3	2	5.6	42.2	2
大阪	11.4	52.7	2	11.0	52.0	2	16.3	61.5	2	5.7	42.4	2
東京	11.5	52.9	2	11.1	52.2	2	16.4	61.7	2	5.8	42.6	2
新潟	11.6	53.1	2	11.2	52.4	2	16.5	61.9	2	5.9	42.8	2
青森	11.7	53.3	2	11.3	52.6	2	16.6	62.1	2	6.0	43.0	2
麻尼刺	11.8	53.5	2	11.4	52.8	2	16.7	62.3	2	6.1	43.2	2
刺	11.9	53.7	2	11.5	53.0	2	16.8	62.5	2	6.2	43.4	2

(一)は零點下を示す。

青森	新潟	東京	大阪	長崎	那覇	内地府	旭川	札幌
1250	1890	2100	1720	2120	1920	750	820	
1270	1820	1250	1200	1200	1200	1000	1010	
40	70	100	100	100	100	0	100	
2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	

北海道	北陸	關東	大津	樺太	京城	釜山	朝鮮	火燒	基隆	臺北	阿里山
1250	700	700	700	700	700	700	700	700	700	700	700
1250	700	700	700	700	700	700	700	700	700	700	700
40	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150	2150

九 本籍別内地人

遷移在住内地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、十六萬四千人にして、内熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山日の兩縣順次に亞き其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府 縣	人口	百分比例	順位
熊本縣	一六,三五三	一〇・一	一
鹿兒島	一六,二五二	九九	二
福岡	八,八八六	五四	三
廣島	八,四〇一	五二	四
山口	七,四四五	四五	五
佐賀	六,七六〇	四二	六
東京	六,四七七	三九	七

内地人總數	一六四	二六六	人中内地に本籍を有せざる者	二六六	人、本籍不詳
青森	二二	〇三	青森	〇三	人
秋田	七六	〇四	秋田	〇四	人
巖手	八七	〇五	巖手	〇五	人
栃木	八五	〇五	栃木	〇五	人
北海道	九三	〇六	北海道	〇六	人
北海	一〇三	〇六	北海	〇六	人
奉天	一〇三	〇六	奉天	〇六	人
塘沽	一〇三	〇六	塘沽	〇六	人
山梨	一〇三	〇六	山梨	〇六	人
富山	一〇三	〇六	富山	〇六	人

内地人總數一六四、二六六人中内地に本籍を有せざる者二六六人、本籍不詳九人を除く。

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那に留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人之に亞く。

	總數	男	女
關東州	四六五	三〇五	一七〇
青島	一五	一五	五
支那	四三三	三〇五	一二八
廈門	三〇五	一九二	一一三
福州	七六六	四八	三二八

一一 在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり。今之が國籍を繰ねるに、支那人はその大部分を占め、二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次に次ぐ。

總數	二萬六千六百六十四
支那	二萬三千四百六十七
英吉利	八十九
北米合衆國	四十二
西班牙	三
智利	二
英領印度	一
ペネシユラ	一
比律賓	一

獨	瑞	佛	葡	丁	諾	希	加	墨	伯	波	濠
亞	西	蘭	葡	蘭	威	威	拿	拿	刺	刺	洲
遠	亞	典	牙	抹	成	成	牙	牙	四	四	洲

本表の外、外國に國籍を有せざる者七九人、國籍不詳三人あり。
 本表には、調査當日基隆港泊の外國船乗組員をも含むを以て國籍
 數比較的多し。

一一 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの、数は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百二十二・五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

年次	總數		男女別内地人千に付	
	男	女	平均	男 女
明治三十八年	六八三	八〇〇	一〇〇	一七二 一七二
大正四年	一六五五	一三四〇	一〇〇	一七五 一七五
同 九年	一七五五	一四九六	一〇〇	一七五 一七五

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙ほ本島千人に對し、僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

年	總數		男女別本島千人に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	二,二七〇	一,〇〇一	四九	〇三
大正四年	五三,三三七	二〇,一四二	一,一六三	二,六六
同 九年	九〇,〇五	八七,八七	二,六六	二,六六

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

同 十年	同 九年	同 八年	同 七年	同 六年	同 五年
四〇八元	四〇九元	三六〇元	四〇九元	三〇九元	三〇六元
四六六元	四七三元	五二六元	四九六元	五〇六元	五四四元
一六二九元	一四四〇元	一四二〇元	一四二六元	一四八〇元	一三三七元
九二五元	二九四七元	六九一元	二四六七元	九四九元	一〇五元
七〇四元	三〇八元	四三三元	三〇八元	三〇八元	三二六元

一五 出生率

臺灣の出生率は之を最近十年間に就て觀るに、年に依りて高低常ならず雖、大正十年には人口千に付四十三人二分を以て最高度を示す。又之を内地人のみに就て觀るに、逐年増加の趨勢にありしものか、大正七年以來降下の傾向を有せしも、大正十年には再び増加の傾向に復して三十五人一分に達したり。本島人の出生率は特に高低常ならずしも、大正十年には四十三人七分を以て最近十年間の新記録を示せり。

更に之を内地其の他と比較するに、臺灣は其の割合最も高くして北海道と稍一致し、内地府縣は我臺灣に於ける内地人のみの出生率と相似たる所あり。又列國中出生率の最も高きは智利の三十六人（大正八年）なるが故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

一 出生率 (人口千に對)

大正元年	平均	内地人	本島人	外國人
	四九	三五八	四五	二八

同四年	四〇九	三〇五	三〇七	二八七	四〇〇	三二五
同五年	三九二	三〇八	三〇七	三〇〇	四〇七	三二二
同六年	四〇六	三〇八	三〇七	三〇〇	四〇九	三二二
同七年	四〇五	三〇〇	三〇八	三〇五	四〇四	三二二
同八年	三九三	三〇八	三〇八	三〇〇	四〇七	三〇八
同九年	三九二	三〇六	三〇八	三〇〇	四〇七	三〇八
同十年	三九三	?	三〇八	三〇〇	?	三〇七

同二年	四〇九	三〇〇	三〇三	四〇五	三〇九	三二七
同三年	四〇四	三〇七	三〇三	三〇三	四〇五	三二七
同四年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇六	三二七
同五年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇九	三二七
同六年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇九	三二七
同七年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇九	三二七
同八年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇九	三二七
同九年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇九	三二七
同十年	三九二	三〇三	三〇三	三〇三	四〇九	三二七

二 内地其の他との出生率異年比較 (人口平均)

大正元年
同二年
同三年

臺灣
朝鮮
樺太
關東州
北海道
内地府縣

一六 死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十年間に就て觀るに、一般に増加の傾向ありしも、大正十年には著しく低下し、人口千に付二十四人四分を以て最低の新記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、大正十年には本島人二十五人なるに對し、内地人は僅かに十三人九分を示せり。

更に之を内地其の他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして北海道之に亞き、朝鮮は内地府縣と稍、一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは智利及西班牙等にして大正八年には智利三十四人、西班牙二十三人を示せり。

一 死亡率 (人口千に付)

	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	三三・五	二八・八	三三・八	一五・四
同 二年	三三・五	二五・五	三三・八	一五・二
同 三年	三二・二	二五・〇	三二・七	一五・五

同六年	三三五	三七一	三〇〇	三〇五	三二四
同七年	三〇八	三〇七	三〇三	三〇九	三〇四
同八年	三〇三	三〇一	二九六	三〇九	三〇四
同九年	三〇五	三〇四	二九八	三〇九	三〇四
同十年	三〇四	?	二五三	?	?

同四年	三三三	一七五	三一九	一九四
同五年	三三三	一六〇	一九八	一九四
同六年	三三五	一六五	一九八	一九四
同七年	三〇八	一九六	一九八	一九四
同八年	三〇八	一九八	一九八	一九四
同九年	三〇五	一九二	一九八	一九四
同十年	三〇四	一九九	一九八	一九四

二 内地其の他との死亡率累年比較 (人口別)

臺灣 朝鮮 樺太 關東州 北海道 内地府縣

大正元年	三三三	一六〇	三二五	一八九	一九八
同二年	三三三	一六〇	三二五	一九七	一九八
同三年	三三三	一九五	三二五	一九八	一九八
同四年	三三三	一九五	三二五	一九八	一九八
同五年	三三三	一九五	三二五	一九八	一九八

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか大正元年には三百三十五萬に増加し、更に大正十年には三百七十五萬に達し過去十年間に一割二分の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、關東州之に亞き、北海道は第三位を占め、臺灣と内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一 最近十箇年間の人口 (各年現在)

大正元年	總數		指數
	男	女	
同 二年	三三三,四四四	一七五,四四四	100
同 三年	三三九,八七九	一七九,八七九	101
同 四年	三四六,七九	一八四,七九	102
同 五年	三五〇,二二〇	一八八,二二〇	103

同七年	100	115	100	100	100
同八年	100	116	101	100	100
同九年	100	117	102	100	100
同十年	100	118	103	100	100

同六年	100	110	100	100	100
同七年	100	111	101	100	100
同八年	100	112	102	100	100
同九年	100	113	103	100	100
同十年	100	114	104	100	100

二 内地其の他との累年人口指数比較

(各年未調査)

内地居住の蕃人を除き、平地の蕃人は之を算入せり。

臺灣 朝鮮 樺太 關東州 北海道 内地府縣

一八 蕃 人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセツト、アモン、ツオウ、パイロン、アミ及
 ヤミの七種族に分つ。大正十年末現在蕃社数は七百五、戸數二萬二千五百二十、
 人口十三萬一千六百九人なるも、就中四萬七千十五人は平地の蕃社に居住するが
 故に、實際蕃地に居住するものゝ數は八萬四千五百九十四人なり。
 各種族中人口最も多きはパイロン族にして總人口の三割一分五厘を占め、アミ
 族の二割八分五厘、タイヤル族の二割三分八厘等順次に強く。

種族	總 數		百分比例	
	男	女	男	女
パイロン	四二、五七	三〇、六六	二〇、六二	一五、一五
タイヤル	三三、〇九	二五、八四	一六、〇八	一三、八八
サイセツト	一六、六八	一〇、五八	八、五三	五、九三
アモン	一〇、九〇	九、三三	五、七六	五、六八
ツオウ	五、七六	五、六八	三、〇九	三、二六
ヤミ	三、二六	三、二六	一、八二	一、八二
總 數	一三三、〇九	九七、五五	一〇〇	一〇〇

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官々制に根本的改正を加へたり。即ち從來の十二廳を五州二廳に改め、五州は之を三市四十七郡に分ち、郡の下には三十四街、二百二十六庄を置き、二廳は之を六支廳に分ち、支廳の下には二街一庄十九區を置き、以て從來の行政區域を全く一變したり。

全	臺北	新竹	臺南	高雄	臺東	花蓮
島	州	州	州	州	州	廳
郡	九	八	二	九	一	一
支廳	六	一	一	一	一	一
市	三	一	一	一	一	一
街	六	四	八	六	一	一
庄	三	四	五	一	一	一
區	一	一	一	一	一	一

本表は大正十二年一月現在を以てす。

二〇 州及廳の面積

五州二廳中、面積の最大なるは、薩中州の四百七十八方里餘にして、高雄、薩南、新竹、薩北、花蓮港の順序を以て之に亞き、薩東廳は二百二十四方里を以て最小の地位を占む。

今之を内地府縣に比較すれば、薩中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、薩南州は愛媛、千葉の中間に、花蓮港廳、新竹州及薩北州は和歌山、京都の中間に、薩東廳は鳥取、佐賀の中間に位す。

一 州及廳の面積

	方里	百分比
全島	二,三三三	100.0
薩北州	三,九〇三	三三
新竹州	二,九六六	二八
薩中州	四,九七七	二一五
薩南州	三,二五二	一五一

和歌山縣	26,685	1
花港縣	20,110	2
新州	21,616	3
北州	21,602	4
京都府	21,575	5
鳥取縣	21,545	6
盛岡縣	21,545	7
佐賀縣	21,545	8

順位は、一、道三府四十三縣及州、廳の面積の順位を示す。

二 内地府縣との面積比較

熊本市	4,191	1
本城縣	4,747	2
山中縣	4,752	3
高口縣	4,806	4
三重縣	4,870	5
愛媛縣	4,975	6
南州	5,151	7
千葉縣	5,516	8

二 州及廳の人口

五州二廳中、人口の最多なるは臺南州の九十七萬九千人にして、臺中州は七十九萬九千人を以て之に亞き、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、臺東の順序を以てし、一方里の人口は同じく臺中州二千七百八十四人を以て最高度を示し、花蓮港廳の百六十九人最も低し。

今之を内地府縣に比較すれば、臺南州は宮城、秋田の中間に、臺中州は巖手、青森の中間に、臺北州は石川、富山の中間に、新竹、高雄の兩州は奈良、鳥取の中間に位し、花蓮港及臺東の兩廳は人口餘りに少くして比較すべき類似の府縣なし。

一 州及廳の人口

(公歷十一年現在)

	實數	百分比例	一方里に付
全	3,752,317	100.0	1,257
臺北州	762,121	20.3	2,574

内地府縣との人口比較

府縣	人口	順位
新州	五七九三	一五
中州	五九四四	二
高州	五八六一	三
高州	五九〇〇	四
東州	五九〇七	五
花港	五八八五	六
宮城	六二七六	七
南	六四二〇	八
秋田	八六八七	九
手	八九四〇	一〇
中	八九四〇	一一
青森	七六八〇	一二
青森	七六八〇	一三

大正九年十月一日現在

府縣	人口	順位
石川	七四七五〇	一
北	七四七〇七	二
山	七四二七六	三
宮	七四二七六	四
富	五六四六七	五
奈	五六四六七	六
新	五六〇二九	七
高	五三二七〇	八
島	四四六五五	九
花	四四四三三	一〇
東	四九七二	一一

順位は一道、三府四十三縣及州、廳の人口の順位を示す。

三三 主要都市

臺灣には三市、三十六街あり、就中人口二萬以上の市及街は十九にして、その第一位を占むるは臺北市の十七萬三千四百、之に次ぐは臺南市の七萬九千六百、基隆街の五萬一千六百、嘉義街の三萬九千七百、高雄街の三萬七千五百、臺中市の三萬四千七百、新竹街の三萬三千六百等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東街は僅かに七千三百、同じく花蓮港街は六千四百を有するのみにして要港部の所在地たる馬公街は一萬九千六百を算す。

次に州及廳の所在地たる三市、四街を内地其の他の都市に比較するに、我が臺北市は東京、大阪、神戸、京都、名古屋、横浜、京城、大連、長崎の九市に並んで實に第十位を占め、廣島市の上に位し、臺南市は平壤及釜山と伯仲して和歌山、静岡兩市の中間に、高雄街は若松(福島)松江兩市の中間に、臺中市は四日市、小倉兩市の中間に、新竹街は小倉、佐賀兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樞太の首府豊原よりも少し。

一 主要都市の人口

（大正十年末報告）

市街名	總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	1,752,596	1,404,616	2,421,001	1,001	1
臺南市(臺南州)	792,626	1,327,616	2,682,616	2,524	2
基隆街(臺北州)	512,101	3,282,616	2,602,616	3,251	3
嘉義街(臺南州)	2,572,616	6,002,616	2,602,616	7,002	4
高雄街(高雄州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	5
臺中市(臺中州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	6
新竹街(新竹州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	7
鹿港街(臺中州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	8
斗六街(臺南州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	9
大溪街(新竹州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	10
清水街(臺中州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	11
麻豆街(臺南州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	12
屏東街(高雄州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	13
埔里街(臺中州)	2,011,010	2,602,616	2,602,616	2,602	14

市街名	總數	内地人	本島人	外國人	順位
豐原街(同)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	15
員林街(同)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	16
淡水街(臺北州)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	17
南投街(臺中州)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	18
宜蘭街(臺北州)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	19
馬公街(高雄州)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	20
臺東街(臺東廳)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	21
花蓮港街(花蓮港廳)	2,291,010	2,602,616	2,602,616	2,602	22

本表には、人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮、港兩街及要港部所在地たる馬公街を掲ぐ。

二 内地其他の都市との人口比較 (大正十年現在)

京	2,212,626
大	2,102,126
長崎	1,762,626

花	臺	豐	眞	大	佐	新	小
蓮	原	原	大	泊	賀	竹	倉
港	東	大	岡	泊	賀	竹	倉

内地及樺太は大正九年十月二日現在なり。

六四四	七二九	八九四	一〇三三	一二五〇	一三三六	一四七四	一五九四	一七〇一
-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------

四	松	高	若	靜	釜	平	臺	和	札	小	旅	函	廣	瀨
日			松											
市	江	雄	島	岡	山	境	南	山	幌	樺	順	館	島	北

五二六	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三	七三三
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

二三 農業戸數

臺灣の農業戸數は三十九萬三千戸にして、總戸數の五割七分四厘を占め、農業者一戸宛平均耕地面積は二甲に當る。
 今之を内地其の他と比較するに總人口に對する農業戸數の割合最も大なるは朝鮮の八割二分三厘にして臺灣は第二位を占め、樺太は僅かに二割餘を以て最下位に在り。

農業者一戸宛平均耕地面積の最も大なるは北海道の四町五段にして樺太の三町一段之に亞き臺灣は第三位を占め、内地府縣は一町歩を以て最下位に在り。

臺灣
朝鮮
樺太
關東州

農業戸數	總戸數百に 付農業戸數	農業戸數一戸 當耕地面積
三九萬三千	五十四	二〇
二七三、八三二	八五	一六
四萬五	三〇八	三三
四萬八六	五〇六	二三

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は七十七萬六千甲にして、内地
三十七萬五千甲、畑四十萬甲なり。

今之を内地其の他と比較するに耕地面積の總面積に對する割合の最大なるは關
東州の三割二分にして、臺灣は之に亞き、朝鮮の一割九分四厘はその第三位を占
む。耕地の内田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田
を有せず。

關東州	樺太	朝鮮	臺灣	耕地面積		田畑百分比		總面積に對する 耕地面積の割合
				田	畑	田	畑	
10,300,000	1,200,000	4,300,000	2,600,000	1,500,000	500,000	1,000,000	100.0	33.0
1,200,000	1,200,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	1,500,000	100.0	33.0

北海道

八五九〇〇 八五八〇〇 五五三〇〇 一〇〇 九〇

内地府縣

五三三〇〇 三三〇〇〇 三三〇〇〇 〇 一七

面積の單位は、臺灣は甲(九段七畝二十四歩)にして其の他は町なり。

臺灣及關東州は大正十年末現在にして其の他は大正九年末現在なり。

内地及北海道は農商務省刊行農事統計に依る。

朝鮮及樺太は第四十一回帝國統計年鑑に依る。

關東州は關東廳統計要覽に依る。

二五 水利

灌漑に於ける埤圳の数は、一萬二千八百三十八にして、内公共埤圳百十五、認定外埤圳一萬一千七百二十三なり。又其の灌漑面積は三十二萬甲にして、内其の七割は公共埤圳の灌漑に屬す。

埤圳數	灌漑面積	灌漑面積 百分比
總數	三〇,五〇〇	100.0
公共埤圳	三,四〇〇	11.2
認定外埤圳	二七,一〇〇	88.8

本表は大正十年末の事實とす。

二六 農 産

臺灣の農産物は、大正十年中の總生産價額一億七千萬圓にして、内普通作物一億六百萬圓、特別作物四千八百萬圓、園藝作物千六百萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は八千八百萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は三千九百萬圓を以て之に亞き、甘藷の千六百萬圓、蔬菜類の七百萬圓、薯蕷の六百萬圓、茶の四百萬圓、落花生の百九十萬圓、豆類の百六十萬圓、烟草の百萬圓等順次に亞く。

	生産價額	生産價額 百分比例	作付面積	收穫高
總 額	一七,〇〇〇,〇〇〇 圓	100.0		
普通作物	一〇,〇〇〇,〇〇〇 圓	58.8		
米	八,八〇〇,〇〇〇 圓	51.8	五,〇七〇,〇〇〇 畝	四,九七三,三三三 石
甘蔗	一,五八〇,〇〇〇 圓	9.3	三,四四五 畝	二,四七三,〇八七 石
豆類	一,五〇〇,〇〇〇 圓	8.8	二,八二〇 畝	九,九〇三 石
薯蕷	一,〇〇〇,〇〇〇 圓	5.9	五,五九九 畝	三,四四六 石
小 麥	一,〇〇〇,〇〇〇 圓	5.9		

其	蔬	李	模	鳳	橫
其	菜	仔	梨	梨	櫛

一四八六五	七〇六六六	一五三〇八	三三三三三	三三三三三	三三三三三
-------	-------	-------	-------	-------	-------

〇〇	〇〇	〇一	〇一	〇一	〇一
----	----	----	----	----	----

			一〇〇八	六五九	
--	--	--	------	-----	--

		三〇四八五五〇	五四三七八九	六九九三三六	八二六〇五二六
--	--	---------	--------	--------	---------

龍	柑	粵	園	其	藍	胡	亭	黃	煙	落	茶	甘	特
眼	桶	蕉	麟	作	他	麻	麻	麻	草	花	生	蔗	川
物	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物

五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五	五〇〇五五
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

三〇〇五三	一五五三六	八六一七〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

二七 畜産

臺灣の畜産物生産總價額は大正十年に三千二百萬圓を算し、内家畜生産二千七百萬圓、家禽生産四百萬圓、牛乳三十七萬圓なり。
 家畜生産中、豚は二千四百萬圓を以て第一位を占め、水牛の百七十萬圓之に亞き、家禽生産中第一位を占むるは鶏の三百五十萬圓なり。

種類	生産價額	生産價額 百分比
總額	三,二〇〇,〇〇〇 圓	100.0
家畜	二,七〇〇,〇〇〇	八四.八
水牛	一,七〇〇,〇〇〇	五三.一
黄牛	四九八,〇〇〇	一五.六
其他牛	八〇,〇〇〇	二.五
豚	二,四〇〇,〇〇〇	七五.〇
山羊	一〇〇,〇〇〇	三.一
其他	一〇〇,〇〇〇	三.一

家
禽
鷄
鴨
鵝
七
牛
而
乳

鷄
鴨
鵝
鷄
鴨
鵝
鷄
鴨
鵝
鷄
鴨
鵝

100
100
100
100
100
100
100
100

二八 林 産

臺灣の林産物生産總價額は大正十年に八百四十萬圓を算し、内官行生産額二百二十五萬圓、一般生産額六百十四萬圓なり。
官行生産額中第一位を占むるは丸太の百四十萬圓にして、一般生産額中にては竹材の百七十萬圓第一位を占む。

	價 額	百分比例
總 額	八三六、八七〇	100.0
官行生産額	二五二、〇七〇	30.1
丸 太	一四二、一〇五	17.0
製 材	42,000	5.0
副 生 品	7,000	0.8
一般生産額	六二四、七〇〇	74.9
木 林	一〇九、一三三	13.0
竹 材	一六五、五六七	20.1

藤

木

薪

二三八五九

一六

炭

六六

八〇五九五

六六

二四七五三

六九

官行生産額とは營林所の生産を意味す。
符は農作物中に掲せざるを以て、重複を避けんが爲、木表には之を
省略す。

二九 鐵 産

臺灣の鐵産總價額は大正十年に一千萬圓を算し、内石炭は總生産價額の約八割、即ち八百三十萬圓を以て第一位を占め、金は百二十萬圓を以て之に亞き、銅の六十萬圓、石油の十八萬圓等順次に亞く。

品名	總 額	産 額	價 額	價額百分比
石炭(噸)	1,000,000	1,000,000	800,000	100
金(匁)	200,000	200,000	120,000	76
銅(斤)	1,900,000	1,900,000	120,000	12
石油(石)	600,000	600,000	18,000	3
銅礦(貫)	1,000,000	1,000,000	17,000	17
硫黃(斤)	1,000,000	1,000,000	6,000	6
銀(匁)	200,000	200,000	5,000	5
砂金(匁)	100,000	100,000	3,200	32
砂鐵(斤)	100,000	100,000	2,800	28

III 水産

臺灣の水産總價額は大正十年には一千萬圓以上に達し、内水産漁獲物五百九十九萬圓、養殖場漁獲物二百二十萬圓、水産製造物百七十萬圓、製鹽六十七萬圓なり。

更に之を品目別に見れば、虱目魚の百二十八萬圓第一位を占め、加納魚の百二十六萬圓、鱈節の九十九萬圓、車躰の六十九萬圓、鯧仔の五十二萬圓等順次に至る。

水産漁獲物	價額	百分比
加納魚	1,086,750	100.0
車躰	593,217	54.7
鯧仔	521,870	47.9
鱈節	692,055	63.7
虱目魚	2,610,111	240.6
沙仔魚	1,412,611	129.8
總額	10,867,500	1000.0

三一 工業

臺灣の工業總生産價額は、大正十年に二億六百萬圓を算し、内砂糖の九千五百萬圓は群を抜いてその第一位を占め、製糖の三千二百萬圓・糯米の千八百萬圓、酒精の千二百萬圓、酒類の九百九十萬圓、再製茶の八百萬圓等順次に亞く。

品名	生産價額	百分比
總額	2,600,000,000	100
砂糖	950,000,000	36.5
製糖	320,000,000	12.3
糯米	1,800,000,000	69.2
酒精	1,200,000,000	46.2
酒類	990,000,000	38.1
再製茶	800,000,000	30.8
鐵工及雜物等	400,000,000	15.4
木製品	220,000,000	8.5

其	製	金	敷	石	油	味	金	調	煉	麵	染	セ
他	粉	銀	瓦	灰	槽	油	工	料	瓦	類	色	メ
												ン
												ト

其	製	金	敷	石	油	味	金	調	煉	麵	染	セ
他	粉	銀	瓦	灰	槽	油	工	料	瓦	類	色	メ
												ン
												ト

五	五	五	五	八	八	八	八	九	九	一	一	一
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

三三糖業

臺灣の糖業は大正十一年期に於て、公稱資本額二億七千萬圓、作業工場數百九十七、許可作業能力三萬七千六百九十噸を有し、其の製糖高五億八千八百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十五、許可作業能力三萬五千噸を有し、その製糖高五億七千四百萬斤を算す。

總數	公稱資本金	作業工場數	許可作業能力	製糖高	製糖高百分比
新式製糖會社	三,七〇〇,〇〇〇圓	一三	三〇,〇〇〇噸	八,八七〇,〇〇〇斤	一〇〇
臺灣製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	一〇	一〇,〇〇〇噸	一〇,〇〇〇,〇〇〇斤	一一三
東洋製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	六	四,〇〇〇噸	八,〇〇〇,〇〇〇斤	一〇三
明治製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	五	五,〇〇〇噸	七,〇〇〇,〇〇〇斤	一〇四
帝國製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	五	三,〇〇〇噸	五,〇〇〇,〇〇〇斤	九四
新高製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	三	三,〇〇〇噸	五,〇〇〇,〇〇〇斤	八七
鹽水港製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	六	四,〇〇〇噸	五,〇〇〇,〇〇〇斤	一〇三

大日本製糖	三〇五〇〇〇〇〇	二	三二〇〇	五九五〇〇〇〇〇	一〇二
淮南製糖	一〇一五〇〇〇〇	三	一〇七〇	三二六〇〇〇〇	三三
新竹製糖	七五〇〇〇〇〇	一	五〇〇	五〇九六〇〇〇	〇九
林本源製糖	五〇〇〇〇〇〇	一	五〇	八二〇〇〇〇〇	二二
沙撈越製糖	五五〇〇〇〇〇	一	五〇〇	五七六二〇〇	〇五
臺東製糖	一七五〇〇〇〇	一	五〇	一〇九七三三	〇五
新興製糖	一三〇〇〇〇〇	一	五〇〇	八〇四〇〇〇〇	〇五
改瓦糖廠	—	一	一六〇	六四〇〇〇〇	一一
舊式糖廠	—	一	一三〇	八二四三〇〇〇	一〇

大正十一年期は、大正十年十一月より同十一年十月に至る期間を云ふ。

三三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間貿易)の二種に分つへきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。然るに大正二、三の兩年は砂糖の減産と一般商況の不振に依り少しく減退したるも大正五年には世界大戦の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には三億圓を越え、大正八年には更に三億圓を突破し、翌大正九年には三億八千九百萬圓と云ふ新記録を作り、之を大正元年に比すれば實に二十一割の増加にして、人口一人當百六圓を算す。然るに大正十年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億八千六百萬圓に減退し、人口一人當も亦七十六圓に下れり。次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに内地貿易は常に過半數を占め、少きも七割、多きは七割八分に達す。

一 貿易總表

三 内地貿易

年	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
大正元年	1,472,700	100	1,472,700	1,472,700	0
同 二 年	1,402,600	95	1,402,600	1,402,600	0
同 三 年	1,599,600	109	1,599,600	1,599,600	0
同 四 年	1,633,000	111	1,633,000	1,633,000	0
同 五 年	1,470,800	100	1,470,800	1,470,800	0
同 六 年	1,332,500	90	1,332,500	1,332,500	0
同 七 年	1,499,900	102	1,499,900	1,499,900	0
同 八 年	1,495,500	102	1,495,500	1,495,500	0
同 九 年	1,555,000	106	1,555,000	1,555,000	0
同 十 年	1,597,500	109	1,597,500	1,597,500	0

(-) は輸出超過なり。

二 外國貿易

年	總額	指數	外國貿易	内地貿易	外國貿易(%)	内地貿易(%)	總一人當
大正元年	1,472,700	100	1,472,700	1,472,700	100	0	1,472,700
同 二 年	1,402,600	95	1,402,600	1,402,600	100	0	1,402,600
同 三 年	1,599,600	109	1,599,600	1,599,600	100	0	1,599,600
同 四 年	1,633,000	111	1,633,000	1,633,000	100	0	1,633,000
同 五 年	1,470,800	100	1,470,800	1,470,800	100	0	1,470,800
同 六 年	1,332,500	90	1,332,500	1,332,500	100	0	1,332,500
同 七 年	1,499,900	102	1,499,900	1,499,900	100	0	1,499,900
同 八 年	1,495,500	102	1,495,500	1,495,500	100	0	1,495,500
同 九 年	1,555,000	106	1,555,000	1,555,000	100	0	1,555,000
同 十 年	1,597,500	109	1,597,500	1,597,500	100	0	1,597,500

大正	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年
總額																	
9,250	8,263	8,737	8,812	9,067	9,336	9,756	10,207	10,708	11,241	11,807	12,406	13,039	13,706	14,408	15,145	15,918	16,727
指數	90	92	94	96	98	100	102	104	106	108	110	112	114	116	118	120	122
移出																	
4,783	4,047	4,578	4,848	5,125	5,408	5,796	6,189	6,587	7,000	7,418	7,841	8,269	8,702	9,141	9,585	10,034	10,488
移入																	
4,467	4,216	4,159	3,964	3,942	3,928	3,960	4,019	4,091	4,167	4,240	4,319	4,403	4,487	4,571	4,655	4,739	4,823
移出超過																	
316	831	419	884	183	480	788	169	687	153	648	149	568	137	570	146	445	615

(一)は移入超過なり。

(一) 移出超過

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り、即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘、多きは四割四分を占め、輸入貿易に於ては更にその割合大にして、少きも三割四分、多きは四割八分を占む。

今大正十年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額六千四百萬圓中、輸出額は二千四百萬圓にして、就中支那の九百二十萬圓最も多く、總額の三割に當り、香港の四百六十萬圓、北米合衆國の三百三十萬圓、蘭領印度の三百萬圓等順次之に亞く。輸入額四千萬圓中第一位を占むるは支那の一千九百五十萬圓にして、總額の四割八分に當り、蘭領印度の六百六十萬圓、北米合衆國の五百萬圓、英吉利の二百萬圓、英領印度及海峽植民地の百八十萬圓、關東州の百八十萬圓等順次之に亞く。

輸出

支那	北米合衆國	香港	關領印度	英領亞米利加	英領吉利	比律賓諸島	關東州	英領東印度	及海峽植民地	其他諸國	總額
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇
三,五〇〇	九,二六〇	四,五〇〇	三,〇〇〇	二,八〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	三〇,〇〇〇

二 輸 入

本表中國名の排列順序は六箇年を合算したる總額の多きものより順次記入す

支那	北米合衆國	關領印度	英領東印度	波多利	英領吉利	佛領印度	其他諸國	總額
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇
一,九〇〇	四,九〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一〇,〇〇〇

本表中國名の排列順序は六箇年を合算したる總額の多きものより順次記入す

三五 支那香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要な地位を占む。即ち大正十年に就て觀るに、輸出額は一千八百八十萬圓にして、輸出貿易總額の七割九分七厘を占め、輸入貿易は二千九百萬圓にして、輸入貿易總額の七割二分に當れり。

一 輸 出

	大正十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
總額	1,880,000	1,750,000	1,740,000	1,640,000	1,570,000	1,480,000
支那	910,000	820,000	810,000	760,000	730,000	680,000
香港	450,000	400,000	390,000	360,000	350,000	330,000
南洋	520,000	530,000	540,000	520,000	510,000	470,000

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度、暹羅及濠太刺利を謂ふ、以下同し。

總
支 香 南

額 那 港 洋

輸出	57	1000
輸入	71	1000
輸出	194	1000
輸入	20	1000
輸出	22	1000
輸入	37	1000

外國貿易總額
に對する割合

支那香港南洋貿易總
額に對する百分比例

總
支 香 南

額 那 港 洋

輸出	57	1000
輸入	71	1000
輸出	194	1000
輸入	20	1000
輸出	22	1000
輸入	37	1000

例

二 輸 入

大正十年

同九年

同八年

同七年

同六年

同元年

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは茶、砂糖、石炭、樟腦、燐寸、棉織物等なり。今大正十年に就て之を觀るに茶は七百九十萬圓を以て第一位を占め、石炭の六百六十萬圓、砂糖の二百三十萬圓、棉織物の百三十萬圓等順次之に亞ぎ、樟腦は經濟界の世界的不況の影響を受け前年の四百三十萬圓より二十八萬圓に減退したり。

次に輸入品の主要なるものは豆油槽、砂糖、阿片、米、木材及板、石油等にして、大正十年には豆油槽の六百三十萬圓第一位を占め、砂糖の五百四十萬圓、木材及板の二百二十萬圓、石油の百九十萬圓、阿片の百五十萬圓等順次之に亞ぐ。

一 輸 出

	大正十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
總	三,五四三,四四三	三,一五三,四四三	三,五三三,四四三	三,三三三,四四三	四,〇二六,四四三	一,四六〇,四四三
茶	七,四四五	六,四〇〇	八,〇〇〇	八,六二二	四,五五七	六,六七〇
砂糖	三,三三五	六,九六六	七,六六六	六,三三三	一,五七五	一,七二二

石炭	6,512	8,422	8,000	3,840	1,833	2,261
樟腦	260	4,555	5,000	2,900	4,500	4,500
磷寸	7,900	1,500	2,250	2,500	1,900	2,200
綿織物	1,300	2,200	1,300	1,200	1,400	1,200
乾魚及鹹魚	9,200	6,500	6,200	10,000	12,200	9,000
苧麻	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
酒類	7,500	2,200	2,200	8,000	7,000	7,000
龍眼	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
鰹及乾鳥賊	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
其他	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
總額	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200

大正十年 同九年 同八年 同七年 同六年 同元年

二 輸 入

本表中品目の排列順序は前年を合算したる總額の多きものより順次記入す。

豆油	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
砂糖	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
阿片	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
米	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
木材	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
石炭	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
包油	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
燻草	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
豆類	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
紙類	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
綿織物	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
小麥粉	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
鐵粉	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
鐵(共)	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
其他	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200
總額	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200	2,200

大正十年 同九年 同八年 同七年 同六年 同元年

本表中品目の排列順序は前年を合算したる總額の多きものより順次記入す。

三七 重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、酒精、樟腦及樟腦油、芭蕉實等なり。今大正十年に就て之を觀るに、砂糖は八千四百七十萬圓を以て第一位を占め、米の一千九百三十萬圓、酒精の五百八十萬圓、樟腦及樟腦油の三百五十萬圓、芭蕉實の四百二十萬圓等順次に亞く。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、各種機械及同部分品、肥料、鹹魚及乾魚、鐵、酒類、木材及板材、建築材料等にして、大正十年には各種機械及同部分品八百七十萬圓を以て第一位を占め、綿織及絹織布の七百七十萬圓、酒類の六百十萬圓、鐵の六百萬圓、鹹魚及乾魚の四百九十萬圓、木材及板材の四百四十萬圓、各種肥料の四百四十萬圓等順次に亞く。

一 移出

大正十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
額 三六八七	一八〇五三	二四三〇六	〇五五五三	一〇五八八	四八三三

米 一六八〇 一四七 一六二 三六七 一八〇 一〇八
 鐵 製 品 一〇一 一九六 一〇七 一六三 一三三 五七
 煙 草 三三九 一五〇 一〇六 八六 六四 六五
 セ ン ト 一四三 一四三 一〇六 四〇 一〇七 一四六
 其 他 一六五 四六四 一八五 二四四 一四〇 一七五
 本表中品目の排列順序は六箇年を合算したる總額の多きものより順次記入す。

三八 港別貿易

大正十年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額二億八千六百萬圓を港別に觀れば、基隆の一億三千九百萬圓第一位を占め、總額の四割九分に當り、高雄の一億二千二百萬圓之に亞て四割二分を占め、安平の一千萬圓、淡水の九百萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙ほ僅かに總額の九分を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港に比較するに、基隆は横濱、神戸、大阪、大連に亞て第五位を占めて釜山の上に位し、高雄は釜山と大同の中間に在りて第七位を占む。更に安平は三池と小樽との中間に、淡水は小樽と敦賀との中間に位す。

港名	總額	輸出	輸入
基隆	一,三九,〇〇〇,〇〇〇	六,〇八,〇〇〇	六,四四五
高雄	一,二二〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二二〇,〇〇〇
安平	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	〇
淡水	九〇〇,〇〇〇	九〇〇,〇〇〇	〇
基隆	一,三九,〇〇〇,〇〇〇	六,〇八,〇〇〇	六,四四五

敦	淡	小	安	三	門	高	釜
賀	水	榎	平	池	司	雄	山
七〇三	九三九	一〇三九	二五七九	八九四六	一三三三	三六六六	五〇〇〇
七〇三	九三九	一〇三九	二五七九	八九四六	一三三三	三六六六	五〇〇〇
七〇三	九三九	一〇三九	二五七九	八九四六	一三三三	三六六六	五〇〇〇
七〇三	九三九	一〇三九	二五七九	八九四六	一三三三	三六六六	五〇〇〇

釜山の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。

三九 財政

薩州總督府特別會計が全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしか、爾來年々共に其の額を増大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億二千九百萬圓を以て新紀錄を作りたり。然るに大正十年度よりは更に減退を示し、大正十一年度には一億六百萬圓を豫算せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は年に依り多少の高低あるも、少きは三割九分、多きは六割を占む。歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正九年度には九千五百萬圓に達したるも、大正十年度には少しく減退を示し、大正十一年度には歳入と同しく一億六百萬圓を豫算せり。

明治三十八年度	歳入			歳入百分比例			歳出		
	總額	租稅	其他	總額	租稅	其他	總額	租稅	其他
1,500,000	1,000,000	400,000	100,000	66.7%	26.7%	6.7%	2,000,000	1,500,000	500,000

同 十 一 年 度	同 十 年 度	同 九 年 度	同 八 年 度	同 七 年 度	同 六 年 度	大 正 元 年 度
2,000,000	1,800,000	1,500,000	1,200,000	1,000,000	800,000	700,000
1,000,000	900,000	800,000	700,000	600,000	500,000	400,000
1,000,000	900,000	700,000	500,000	400,000	300,000	300,000
1,000,000	900,000	700,000	500,000	400,000	300,000	300,000
1,000,000	900,000	700,000	500,000	400,000	300,000	300,000

本表中大正九年度迄は決算、大正十年度は現附、大正十一年度は豫算なり。

四〇 專 賣

臺灣の專賣は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、就中酒は大正十一年七月以降の實施さす。今最近十年間に於ける專賣の賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものが、大正六年度には二千萬圓を越ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ樟腦の如きは特に前年度の九百萬圓より三百萬圓に減退したる爲め、總額も二千三百萬圓に低下したり。

年 度	總 額	阿片	食 鹽	樟 腦	煙 草	指 數
大正元年度	17,000,000	16,000,000	1,000,000	—	—	100
同 二年度	18,000,000	17,000,000	1,000,000	—	—	105
同 三年度	19,000,000	18,000,000	1,000,000	—	—	110
同 四年度	20,000,000	19,000,000	1,000,000	—	—	115
同 五年度	21,000,000	20,000,000	1,000,000	—	—	120
同 六年度	22,000,000	21,000,000	1,000,000	—	—	125

四一銀行

臺灣に於ける銀行は大正十年十二月末現在行數七（内三十四銀行支店）にして、其支店數四十三、資本金九千三百萬圓、準備金一千六百萬圓、純益金一千萬圓、預金七千六百萬圓、貸出金二億一千萬圓なり。

總 數	支店 數	公稱			
		資本金	準備金	純益金	預金
臺灣銀行	一	九,000,000	1,000,000	7,000,000	3,000,000
華南銀行	一	1,000,000	100,000	900,000	2,000,000
新高銀行	一	800,000	100,000	700,000	1,000,000
彰化銀行	一	600,000	100,000	500,000	800,000
臺灣商工銀行	一	500,000	100,000	400,000	600,000
嘉義銀行	一	300,000	50,000	250,000	400,000
三十四銀行	一	500,000	100,000	400,000	600,000
支店					
總計	七	13,400,000	1,600,000	11,800,000	10,000,000

四二物價

米 甘藷 麥麵 米麵 醬油 酒類 肉類 豚肉 木炭 薪

大正元年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同二年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同三年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同四年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同五年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同六年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同七年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
同八年	100	100	100	100	100	100	100	100	100

同	同
十	九
年	年
一	一
六	五
二	四
七	三
三	五
一	六
五	五
五	一
三	三
三	九
一	三
四	六
三	五
一	五

四三 教 育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内籓人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校は六百六十三校、児童二十萬人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校は十七校、生徒四千四百人、師範學校は二校、生徒千八百人、實業教育機關たる簡易實業學校、農業學校、工業學校、商業學校は三十三校、生徒二千四百人、専門教育機關たる高等商業學校、醫學專門學校、高等農林學校、商業專門學校は四校、生徒八百人、私立各種學校二十校、生徒二千七百人、非房百九十六、生徒七千人あり。

次に初等教育機關を内地其の他と比較するに人口千に對する小學校児童數は北海道の百五十二人最も多く、樺太の百十八人五分最も少く、我臺灣は百二十二人六分を以て僅かに樺太の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の公立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の公立普通學堂児童の人口千に對する割合は樺太の九十一人六分最も多く、我臺灣は五十人二分を以て之に亞き、朝鮮は僅かに八人八分を以

て最下位に在り。

一 教育機關

大正十一年十月末日現在

學校數	教員數	生徒又は 児童數	教員一人 に付生徒
高等商業學校	1	1	1
醫學專門學校	1	1	1
高等農林學校	1	1	1
商業專門學校	1	1	1
高等學校	1	1	1
師範學校	1	1	1
中學校	1	1	1
高等女學校	1	1	1
農業學校	1	1	1
工業學校	1	1	1
商業學校	1	1	1

二 内地其の他の初等教育比較

小學校、公學校、簡易實業學校、私立各種學校及書房の學校數、教員は
大正十一年三月末日現在にして其の生徒數は同三月一日現在なり。
簡易實業學校の教員は公學校よりの業務なり。

小學校	公學校	簡易實業學校	私立各種學校	書房
133	13	6	10	1
76	473	1	16	33
335	16503	133	366	693
26	77	?	26	35

小學校	校數	教員數	児童數	一校平均 均児童に 付児童	教員一人 に付児童	人口千に 付児童
榊	133	76	335	26	335	285
朝	13	47	165	26	335	285
鮮	6	1	16	33	693	285
太	1	33	26	693	35	285

關東州	二五	二四二	八七六	九一九	三六三	二五九
北海道	二二七	七〇二	五五四三	三〇九八	五〇六	一五三〇
内地府縣	二四八七	二七、五九九	八〇、四九九	三、六八	四、六七	一、九三
公學校						
滿洲	五三	四七三	一六、五〇三	五、六三		五〇三
朝鮮	七五	三、五五二	一五、〇五二	三、三〇	四、八	八八
樺太	一〇	一	一七九	一七九	?	九一六
關東州	二五	四〇〇	一、七九九	一、五二〇	四、四	二、六三

公學校の朝鮮は公立普通學校、樺太は土人教育所、關東州は公立普通學校の事實なり。
 樺太土人教育所の教員は小學校よりの兼務なり。
 關東州は州内のみの事實なり。
 人口に付兒童算出の基數は、小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。
 朝鮮は大正十年五月末日現在にして大正十一年最近朝鮮事情要覽に依る。

臺灣の兒童は大正十一年三月一日現在なり。
 北海道及内地府縣は大正九年三月、樺太は大正十年三月の現在なり。

四四 衛生機關

臺灣には大正十年末現在、官立十二、公立二十、私立八十四、計百十六の醫院と、八百十六名の醫師と、六百七十四名の衛生士、四百二十三名の産婆及助産婦と有す。醫師衛生一人に對する人口は全島平均二千五百十八人にして、その割合の最も少きは臺北州の千九百十三人、最も多きは臺東廳の四千三百四十三人なり。

總數	官立		公立		私立		總數	醫師	衛生	産婆及助産婦	人口
	院	醫師	院	醫師	院	醫師					
臺北	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1,913
新竹	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2,021
臺中	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2,021
臺南	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2,021
高雄	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2,021
臺東	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4,343
總計	12	20	84	166	166	166	166	166	166	166	166

花蓮港廳

一 一 二

元 元

一

八

三六六

醫生は明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て
其の管轄内に於て醫師を兼さ爲す者とす。
本表の外藥劑師百二人、齒科醫師六十九名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道の總數は二十二箇所にして、其の所管は臺灣總督府所管一(恒春、南支那、陸軍省所管三(隆東、玉里、ハリソ)、州所管二(高雄、屏東)にして其の他は總て所在市街庄の經營に係る。

大正十年度末現在給水戸數は計量器の設備なき分七箇所を除き約三萬一千戸にして同年度中の消費水量は同しく千九百七十四萬立方米なり。

名 稱	給 水 開 始 年 月	年度末現在		年度中消費水量(立方米)	
		戸數	計量器	總 數	放任供給
淡 水	明治三二年三月	七	〇	二、七〇〇	〇
基 隆	同 三五年三月	七	〇	二、七〇〇	〇
彰 化	同 四一年三月	一七	〇	五、六〇〇	〇
臺 北	同 四二年四月	八、五五	〇	一、六八八	〇
北 投	同 四四年六月	三	〇	七、九〇〇	〇
士 林	同 四四年九月	三	〇	一、〇〇〇	〇

大	甲	同	四五年六月	一八五	五五	三六六〇	一九三〇	三七一〇
斗	六	同	四五年六月	一八	大	二七四〇	五九七〇	八二四九
高	雄	同	大正二年四月	一六七	一〇六	三四四一五七	四七五四	一九九四三
嘉	義	同	三年二月	七五	一六二	一六四九六	四三〇四	一四三〇九
三	里	同	三年三月	五	一七	三三〇	四一四〇	六六〇
蕨	中	同	五年五月	一七〇	五二	一七九四〇	三九四九	九七五三
屏	東	同	五年二月	五五	四六	五〇〇二	〇三九	四九八〇
花	東	同	五年二月	一七	一〇	三〇〇	一七五	三六八

本表の外金山、豊原、蓬東、ハリ、恒春(種畜場)、新化、玉里の七水道ありし、計量器の設備なく爲に消費水数不明に付之を除く。
 右の外工事中に属するものに濰南水道あり、大正十一年十二月より給水を開始す。

四六 ベストとマラリア

臺灣は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衛生設備の完成と共に、近年其の面目を一新し、ベストの如き大正七年以來全く之れが發生を見ず。又マラリアの如き其の死亡数は逐年減退し、明治三十九年に於て人口千に付死亡數三人二分一風なりしものが、大正十年には、人八分八厘に減退し、其の實數に於ても同年間に三割三分を減したり。

年	死亡實數		指數		人口千ニ付死亡	
	ベスト	マラリア	ベスト	マラリア	ベスト	マラリア
明治三十九年	1,550	10,530	100	100	0.75	3.20
同 四十年	1,448	11,750	93	112	0.74	3.70
同 四十一年	1,020	11,000	66	104	0.53	3.50
同 四十二年	840	10,800	54	102	0.45	3.40
同 四十三年	510	9,100	33	86	0.27	3.10
同 四十四年	260	7,900	17	75	0.14	2.80

同 同 同 同 同 同 同 同 大
 正
 十 九 八 七 六 五 四 三 二 元
 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年

| | | | 三 二 高 陽 三 三

七〇五 七六〇 八二〇 八三三 九七九 二二四 二二四 八八五 六六三 六六九

| | | | 〇 〇 三 元 元 元

卷 三 七 九 三 〇 三 八 三 六

| | | | 〇〇 〇〇 〇〇 〇四 〇四 〇六

一八 三三 五五 五五 五五 五五 五五 二六 一五 五九

四七 阿片吸食特許者

臺灣總督府は阿片問題に就ては嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片吸食者
を認むる者に限り之が吸食を許可し、漸次之が絶滅を期し、逐年豫期の目的の到
達に近づきつゝあり。即ち之を最近十年間に就て觀るも、阿片吸食特許者（本島
人）の數は八萬七千三百七十一人より四萬四千九百二十二人に半減したり。

年	總數	男	女	指數	男	女
大正元年	八七、七二一	七五、九七九	一一、七四二	一〇〇	八八	一四
二年	八二、二六	七二、八一	一〇、四五七	九三	八三	一〇
三年	七六、九七五	六八、四〇〇	八、五七五	八七	七七	一〇
四年	七二、七二五	六四、二五六	八、四五九	八二	七六	一三
五年	六八、四〇〇	六〇、〇〇〇	八、四〇〇	七七	七〇	一三
六年	六四、二五六	五五、八〇〇	八、四五六	七二	六五	一三
七年	五九、〇〇〇	五二、〇〇〇	七、〇〇〇	六七	六〇	一三

特許年數以上の
本島人百に對し

同 同 同
 八 九 十
 年 年 年
 五〇六三 四〇三三 四二五五
 四八〇〇 四二五五 四八六〇
 五二五 六六七 六四三
 五 五 五
 六 六 六
 四 四 四
 〇 〇 〇

本表は各年十二月末日現在とす。

四八 鐵道

滿洲の鐵道は、大正十年度末には官設鐵道(阿里山鐵道を含む)の營業哩數四百四十哩に達し、外に私設鐵道千二百三哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして、内營業線は三百十八哩なり。

今之を内地其他に比較するに百方に里に付鐵道營業線の哩數は關東州の二百九十一哩九分最多く、我滿洲の六十九哩九分之二に亞き、樺太の四哩一分最も少く、更に人口萬に付哩數は樺太の十哩四分二厘最も多く、朝鮮は一哩未滿にして最も少く、滿洲は二哩を以て内地と伯仲の間に在り。

關東州	樺太	朝鮮	滿洲	營業線延長(哩)		百方に里に付哩	人口萬に付哩
				總數	官設		
六六	一	一五	七五	四〇〇	三六	六九	〇八

北海道 一五五
 内地府縣 二二三
 一六四
 八八五
 二四六
 七
 一九六
 五六
 七六
 三〇

選挙以外は大正九年度末の事實なり。

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、大正十年度に於て通常郵便は引受六千萬、配達六千八百萬、電信は發信百四十萬、著信百四十萬、爲替は振出二千八百七十萬圓、拂渡千七百八十萬圓、貯金は預入一千萬圓、拂戻九百八十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は八千九百四十、年度中通話度數は三千九百五十萬に達す。

今之を内地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受數、電報發信、爲替振出及貯金預入を通過して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣之を占む。又人口十に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは關東州、最も少きは朝鮮なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便
引受
人口十に對する

六〇五六五五
七七八八三三〇
一六〇

電信		貯蓄		電信	
發信	著信	振出	振入	預入	預出
人口十に對する	人口十に對する	人口十に對する	人口十に對する	人口十に對する	人口十に對する
一、三九、九六九	三、七	六、六九、七、八四	一、七、八、三、六、六六	一、〇、〇、四、四、〇〇	九、七、六、〇、〇〇
三、七	三、七	七、六、五	八、九、四	三、八	三、八
一、三九、九六九	三、七	六、六九、七、八四	一、七、八、三、六、六六	一、〇、〇、四、四、〇〇	九、七、六、〇、〇〇
三、七	三、七	七、六、五	八、九、四	三、八	三、八

二 内地其の他との比較

内地府縣	電信		貯蓄		加入者に對する付込額
	發信	著信	振出	預入	
臺灣	一、〇、一	三、七	一、〇、一	三、七	四、四、八
朝鮮	八、八、五	三、七	八、八、五	三、七	四、四、八
奉天	一、三、三、九	三、七	一、三、三、九	三、七	四、四、八
關東州	一、三、三、九	三、七	一、三、三、九	三、七	四、四、八
北海道	六、一、五	三、六	六、一、五	三、六	四、四、八
内地府縣	六、七、七	二、五	六、七、七	二、五	四、四、八

臺灣及樺太は大正十年度、其の他は大正九年度の事實なり。
關東州は關東廳第十六統計書に依り其の他は第四十二回帝國統計年鑑に依る。電話に就ては臺灣以外は逓信省統計要覽に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は大正十年末現在に依れば州警務部五、廳警務課二、警務分署二、郡警察課四十七、支廳六、派出所及駐在所千三百十六にして、同職員の數は警視二十一人、警部及警部補五百五十九人、巡查七千五百八十四人なり。

今之を内地其の他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の三人六分最も多く、臺灣は三人三分を以て之に強き、巡查一人に付人口は北海道の百七十人第二位を占め、内地府縣の千二百九十六人之に亞き、我臺灣は五百六人を以て僅かに構太の上に在り。

州廳	郡	支廳	派出所及駐在所	警視	警部及警部補	巡查	一方里に對する巡查の數	一人に付人口
臺北	二	一	一	一	一	一	一	一
基隆	一	一	一	一	一	一	一	一
新竹	一	一	一	一	一	一	一	一
桃園	一	一	一	一	一	一	一	一
苗栗	一	一	一	一	一	一	一	一
臺中	一	一	一	一	一	一	一	一
南投	一	一	一	一	一	一	一	一
嘉義	一	一	一	一	一	一	一	一
台南	一	一	一	一	一	一	一	一
高雄	一	一	一	一	一	一	一	一
屏東	一	一	一	一	一	一	一	一
花蓮	一	一	一	一	一	一	一	一
台東	一	一	一	一	一	一	一	一
澎湖	一	一	一	一	一	一	一	一
金門	一	一	一	一	一	一	一	一
馬祖	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	二	一	一	一	一	一	一	一

關東州 一三三 二 六八 八六
 北海道 四 六六 一〇 一七
 内地府縣 七五 一六三 二五 三五
 本表巡査一人に付人口中産海の分は露地に在る籍人を算入して算出す。
 産海の警察署には郡役所警察課及支廳を含む。
 關東州は州内のみの事實にして、警務署は警察署に、同支署は警察分署として掲す。
 北海道及内地府縣は大正九年四月一日現在、樺太は大正九年末現在にして第四十一年帝國統計年鑑に依る。

五一 最近十年間の進歩

林 畜 農 耕 總	人 口			大正元年	同 十 年	大正九年末現在にしての増減
	内地	本島	外島			
總	一三三,七〇〇	一七,七〇〇	一,七〇〇	一三三,七〇〇	一三三,七〇〇	〇
内地	一三三,七〇〇	一七,七〇〇	一,七〇〇	一三三,七〇〇	一三三,七〇〇	〇
本島	一三三,七〇〇	一七,七〇〇	一,七〇〇	一三三,七〇〇	一三三,七〇〇	〇
外島	一三三,七〇〇	一七,七〇〇	一,七〇〇	一三三,七〇〇	一三三,七〇〇	〇
農 産	一七,七〇〇	一,七〇〇	一,七〇〇	一七,七〇〇	一七,七〇〇	〇
畜 産	一七,七〇〇	一,七〇〇	一,七〇〇	一七,七〇〇	一七,七〇〇	〇
林 産	一七,七〇〇	一,七〇〇	一,七〇〇	一七,七〇〇	一七,七〇〇	〇

阿片賣渡價額	六〇七、八八六	六、七五、二二四	二二
食鹽賣渡價額	七、四七、九三三	一、七五、六七七	三四
樟腦賣渡價額	九、七五、〇三〇	五、一五、九六一	八九
烟草賣渡價額	四、五四、五四六	二、七五、八八四	九二
教育			
小學校兒童	八、六〇〇	三、三三、七三三	三六
公學校兒童	四、九五、五〇四	一、三三、八〇三	一五
中等學校生徒	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一
實業學校生徒	六、六〇〇	一、三三、七三三	一五
師範學校生徒	四、六〇〇	一、三三、七三三	一五
專門學校生徒	三、三〇〇	八、六〇〇	一〇
鐵道			
官設鐵道	三、三三、八〇三	一、三三、八〇三	一五
私設鐵道	三、三三、八〇三	一、三三、八〇三	一五
運輸			
乘客貨金	三、三三、八〇三	一、三三、八〇三	一五
貨物貨金	三、三三、八〇三	一、三三、八〇三	一五

續產	四、四八、三九二	一、〇八、〇二九	三三
工業	三、五〇、六九七	一、〇四、八七六	三〇
糖業	五、三〇、六九五	三、〇六、五〇二	五八
甘蔗作付面積	七、七五〇	一、四四、八五五	一八
高糖	四、九三、九七九	四、三〇、三六四	八七
貿易			
總額	二、五〇、三〇五	六、六五、二九八	二六
外國貿易	三、四七、七三三	六、三三、七四二	二七
內地貿易	九、一五、五七四	三、三三、八〇三	一四
財政			
歲入	六、〇三、九八六	一、〇六、〇〇〇	一七
歲出	四、七、八八六	一、〇六、〇〇〇	一七
總額	一、七〇、三〇四	二、五〇、三〇四	一〇

私設鐵道哩
郵便、電信及電話
通常郵便引受通數
電報發信通數
爲替換出金額
貯金預入金額
電話加入者
電話通話度數

50,513.00	6,800.00	1,100.00	1,600.00
9,000.00	1,300.00	1,300.00	1,500.00
6,000.00	1,300.00	1,300.00	1,500.00
4,000.00	1,300.00	1,300.00	1,500.00
4,000.00	1,300.00	1,300.00	1,500.00
1,700.00	1,300.00	1,300.00	1,500.00

201

200

208

202

206

204

207

レ

208

大正十二年三月二十五日印刷
 大正十二年三月二十七日發行

臺灣總督府

臺北市大橋町三丁目二番地
 印刷者 澤田照基
 臺北市大橋町三丁目二番地
 印刷所 臺北印刷株式會社